ドイツ語訳における諸問題

——『仏教聖典』ドイツ語訳の場合——

大野昭英

はじめに

日本語を外国語に翻訳する場合には，外国語を日本語に翻訳する場合とは異なった問題が生じる。ドイツ語への翻訳に従事する翻訳者として，翻訳作業に際して直面する問題は数多く，後をたたない。こうした問題のうち，特に，1982年9月に出版した，『仏教聖典』を翻訳中に生じた諸問題の中からいくつかとりあげて考えて見たい。本稿では，用語の問題，雅語の使用の問題，文体の問題，その他に分けて，それに対する対応策だけを記すにとどめる。このため，本稿は，いわば翻訳メモ帳といった感じのものになることを予め御諒解頂きたい。次稿で，これらの対応策を細部にわたって考え，仏典翻訳一般を考察してみたい。

1．キリスト教用語とドイツ語における仏教用語について

『仏教聖典』を翻訳するにあたって，問題となった点の一つは，「救い」，「信仰」，「永遠」，「憐れみ」などの，教義にかかわりのある用語の問題である。一口に信仰と言っても，キリスト教の信仰と仏教の信仰とは異なっており，異なった二つの信仰に，同一の語を用いることは避けた方が良いと思う。また，救いにしても，キリスト教の神の救いと，仏教の仏の救いは，異なっている。慈愛，永遠などの意味もまた，仏教とキリスト教では差異がある事は言うまでもない。キリスト教と仏教の教義の差異を明らかにさすため，キリスト教の用語は出来るかぎり使用しないことにした。2, 3の例をあげてみよう。

「信仰」「信心」

「この仏を拝み見ることによって，また仏の心を拝み見ることになる。仏の心とは大いなる慈愛そのものであり，信心を持つ者を救いとるのはもちろん，仏の慈悲を知らず，あるいは忘れているような人びとをも救いとるのである。」(1)

„Indem man das Bild Buddhas sieht, ist man befähigt, den Geist Buddhas zu erkennen. Der Geist Buddhas beinhaltet ein großes Mitgefühl, das alle einschließt, selbst jene, die von seinem Mitgefühl nichts wissen oder es vergessen haben, und noch mehr jene, die sich im *Vertrauen* daran erinnern.“(2)

「信は仏の教えを受けて，あらゆる功徳をうけとる清らかな手である。信は火である。人びとの心の汚れを清め，同じ道に入らせ，そのうえ，仏の道に進もうとする人々を燃えたたせるからである。」(3)

„*Vertrauen* ist die Hand, die den Dharma empfängt, die reine Hand, die alle Tugenden empfängt. *Vertrauen* ist das Feuer, das all die Unreinheiten der irdischen Leidenschaften verschlingt, die Last von uns nimmt und ist der Führer, der uns auf unserem Wege leitet.“(4)

「憐れみ」「慈悲」

「仏の心とは大慈悲である。あらゆる手だてによって，　すべての人々を救う大悲の心，人

とともに病み，人とともに悩む大悲の心である。」(5)

„Der Geist Buddhas ist *Barmherzigkeit* und *Mitgefül.* Durch seinen liebenden Geist will Buddha alle Menschen mit allen erdenklichen Mitteln erlösen. Mit seinem Geist ist Buddha mit den Menschen krank und erleidet deren Leiden mit.“ (6)

「人の胸のなかにひそむ疑いの闇を破って，信の光をさし入れ給う仏の手のあることを知らなければならない。」(7)

„Man solllte nie vegessen, daß es nicht das eigene Mitleid ist, durch welches das Vertrauen erweckt wurde, sondern es allein *Buddhas Barmherzigkeit* war, ---“(8)

「永遠の」

「永遠の」を意味する語としては，„ewig“ がすぐに思い浮かぶであろうが，„ewig“ はキリスト教用語であるため，これをさけ，„unendlich“ を用いた。

「人はみな，仏は王子の子として生まれ，出家してさとりを得たのだと信じているけれども，実は仏と成ってよりこの方，限りのない時を経ている。限りない時の間，仏は常にこの世にあり，永遠の仏として，全ての人々の性質を知り尽くし，あらゆる手段を尽くして救ってきた。」(9)

„Gewöhnliche Menschen glauben, daß Buddha als Prinz geboren wurde und den Weg zur Erleuchtung als Bettelmönch erlernt habe. In Wirklichkeit hat jedoch eine lange, lange Zeit der Vorbereitung gegeben, denn Buddha lebt in einer Welt, die ohne Anfang und Ende ist.

Der *unendliche* Buddha kennt alle Menschen und wendet alle Mittel und Wege an, ihnen das Leben zu erleichtern. Obwohl die Lehre von Buddha sich von Jahr zu Jahr ändert, ist ihr Ziel immer das gleiche: alle Menschen von der Verblendung zu befreien.“(10)

次に，ここで，ドイツ諸国における仏教用語，というのは，学術用語のことではなく，一般向けの，仏教の紹介書とか解説書の中に見かける用語のことであるが，これについて少しふれておきたい。ドイツ，オーストリアの大学における仏教学の研究は，サンスクリット，パーリ語の典籍を用いて行われており，用語は，サンスクリット，パーリ語，およびその意訳が用いられている。意訳された学術用語は，一般の辞書や辞典には記載されていない。一方，日常語の場合は，と言っても，仏教に関することが話題に上ること自体が，ごくまれなことであるが，こういう場合は，意訳された語が用いられるわけで，一般向けの仏教書も，意訳された語が用いられている。

もちろん，意訳が，日常語の中に定着して，一般の辞書にも記載されている語もある。「涅槃」はその例であり，ギムナジウム卒業程度以上の知識階級なら，その意味内容をよく理解している。ドイツの学生がよく使用しているドイツ語の辞書，Wahrig Deutsches Wörterbuch には，「涅槃」は次のように示されている。

Nirwana 〈n.; unz.; Gen. -s od-; Buddhismus〉 die völlige Ruhe, das Erlöschen aller Lebenstriebe, von den Heiligen schon im Diensseits erreicht; ins ~ eingehen, sterben 〔〈aind. nirvana „erloschen, ausgeblasen“〕

意味の説明の後，最後に，サンスクリットの nirvāna が，古代インド語として示され，この語に対するドイツ語が2つ示されている。このような語は，常に音訳の „Nirwana“ が用いられ，訳語である „Erlöschen“ „Verwehen“ などは，前後関係がなければ „Nirwana“ の意味はなく，あくまでも，„Nirwana“ の訳語でしかない。したがって，「涅槃」に対するドイツ語は，„Nirwana“ であって，„Erlöschen“ ではない。しか

し，„Nirwana“ のように，音訳でドイツ語に定着している仏教用語は，非常に限られた数であるから，サンスクリットかパーリ語を用いるか，その意訳を用いるかのいずれかである。一般向けの書物である『仏教聖典』は，当然，意訳で翻訳するわけであるが，その意訳が，定まっているわけではなく，たとえば「八正道」の一つである「正見」は，「正しいものの見方」であり，これに，„rechte Erkenntnis“ というドイツ語をあてている書物がある，という程度の知られ方である。そして，そのような仏教書を手にしたことのあるドイツ人は，ごくわずかである。この「比較的よく知られた仏教用語」は，無視することも可能であろう。逆に，すでにある，仏教書に親しんで，その用語に慣れているドイツ人がいることも確かであり，そういう人々を無視することは不可能であるようにには思われる。そこで，『仏教聖典』の場合は，すでに知られている用語は出来る限り用いることにした。ここに，それらの用語をいくつか掲げてみる。

「汚れのない」

「信はこの世の糧，功徳は人の貴い住みか，智慧はこの世の光，正しい思いは夜の守りである。汚れのない人の生活は滅びず，欲に打ち勝ってこそ，自由の人といわれる。」(11)

„Auf der Reise des Lebens ist das Vertrauen die Nahrung, tugendhafte Taten sind ein Zufluchtsort. Weisheit ist das Licht am Tag, und vollkommene Achtsamkeit ist der Schutz bei Nacht. Wenn ein Mensch ein *heilsames* Leben lebt, kann ihn nichts zerstören; hat er die Habgier besiegt, kann nichts seine Freiheit begrenzen.“(12)

この個所の，「汚れのない」に対応するドイツ語は „rein“ であり，これに対応する英語は „pure“ であろう。しかし，ドイツ語圏における仏教用語としては，„heilsam“ を用いる場合が多く，この語が定着しつつあるように思われる。„heilsam“ の同義語のひとつは „nützlich“ であるが，„heilsam“ は，にがい経験から教訓を学びとる，という意味において nützlich（有益な）であるわけで，„Es war mir eine heilsame Lehre.“ とか „Diese Erfahrung war für mich heilsam.“ のように用いるものであり，„nützlich“ とはニュアンスが異なり，また，日本語の「汚れのない」とは全く異なった意味を持つものであるが，ドイツにおける用語を用いることにした。

「八正道」

「八正道」に対するドイツ語は，次のように知られている。

八正道	die Achtfache Edle Pfad
正見(正しいものの見方)	rechte Erkenntnis
正思(正しいものの考え方)	rechte Gesinnung
正語(正しいことば)	rechte Rede
正業(正しい行い)	rechtes Tun
正命(正しい生活)	rechter Lebensunterhalt
正精進(正しい努力)	rechte Anstrengung
正念(正しい念い)	rechte Achtsamkeit
正定(正しい心の統一)	rechte Sammlung

„recht“ は „richtig“ と同義語である。„recht“ は，„passend“ „geeignet“ の意味を持ち，„richtig“ は，„fehlerlos“ „der Wahrheit entsprechend“ の意味を持っている。ふつうのドイツ人が，ふつうの意味で，「正しいものの見方」「正しいものの考え方」，と言うとき，„richtig“ を用いることが多い。したがって，『仏教聖典』中の「正しい」の訳語として，„recht“ を用いるのには，ためらいを感じた。結局，„vollkommen“ を用いることにした。この語は，„ohne jeden Fehler“（誤りのない）„unübertrefflich“（この上ない）„hervorragene“（すぐれた）等の意味を持ち，次の文脈中において，不自然さは感ぜられない。

「八正道は，正しいものの見方，正しいものの考え方，正しいことば，正しい行い，正しい生活，正しい努力，正しい念い，正しい心の統一である。

正しいものの見方とは，四つの真理（四諦）

を明らかにして，原因・結果の道理を信じ，誤った見方をしないこと。

正しい考え方とは，欲にふけらず，貧らず，瞋らず，害なう心のないこと。

正しいことばとは，偽りと，むだ口と，悪口と，二枚舌を離れること。

正しい行いとは，殺生と，盗みと，よこしまな愛欲を行わないこと。

正しい生活とは，人として恥ずべき生き方を避けること。

正しい努力とは，正しいことに向って怠ることなく努力すること。

正しい念いとは，正しく思慮深い心を保つこと。

正しい心の統一とは，誤った目的を持たず，智慧を明らかにするために，心を正しく静めて心の統一をすること。」(13)

„Der Achtfache Edle Pfad verweist auf *Vollkommene Erkenntnis, Vollkommene Gesinnung, Vollkommene Rede, Vollkommenes Tun, Vollkommen Lebensunterhalt, Vollkommene Anstrengung, Vollkommene Achtsamkeit, und Vollkommene Sammlung.*

Die Vollkommene Erkenntnis beinhaltet das grundlegende Verständnis von der Vierfachen Wahrheit, das Akzeptieren des Gesetzes von Ursache und Wirkung, sowie sich nicht durch das Äußere und die Wünsche trügen zu lassen.

Die Vollkommene Gesinnung bedeutet den Entschluß, keine Bedürfnisse zu hegen, nicht habgierig zu sein, und keine Tat zu vollbringen, durch die jemand geschädigt werden kann.

Unter der *Vollkommenen Rede* ist die Vermeidung von Lügen, eitlen und verachtenden Worten sowie Doppelzüngigkeit zu verstehen.

Das Vollkommene Tun bedeutet, kein Leben zu zerstören, nicht zu stehlen und keinen Ehebruch zu begehen.

Der Vollkommene Lebensunterhalt betrifft die Vermeidung einer Lebensführung, durch die einem Menschen Schaden zugefügt werden könnte.

Die Vollkommnen Anstrengung beinhaltet den Versuch, fleißig sein Bestes in die richtige Richtung zu tun.

Die Vollkommnene Achtsamkeit bedeutet, einen reinen und besinnlichen Geist zu bewahren.

Die Vollkommene Sammlung bedeutet, den Geist ruhing und in rechter Weise für die Konzentration zu halten, indem man versucht, das wahre Wesen des Geistes zu verwirklichen.“(14)

「出家」「信者（在家者)」は，それぞれ，„hausloser Bruder“ と „Laienanhänger“ が知られており，これらを用いた。

2．直訳と逐語訳について

翻訳とは，まずもって解釈であり，翻訳者はまず読者である。よく解釈出来る者がよき読者であり，よき読者であることが翻訳者の第一歩である。直訳か逐語訳か，という問題は，その後の問題である。まして，日本語からドイツ語への翻訳の場合は，たとえば英語とドイツ語間の翻訳の場合の逐語訳か意訳かの問題とは，おのずから意味が異なり，これを一律に論じることは出来ない。しかし，上記のドイツ語訳からも分るとうり，どちらかと言えば，逐語訳に近い部分が多いと思う。さらに例を示してみよう。

「仏の智慧は海のごとく広大にして，仏の心は大慈悲なり。仏は姿なくして妙なる姿を示し，身をもって教えを説かれた。

この本は二千五百余年間，国を超え民族を超えて保ち続けられてきた五千余巻の仏の教えの精髄である。

ここには仏の言葉が凝縮されており，人々の生活と心の実際の場面に触れて，生きた解答を与えている。」(15)

„Buddhas Weisheit ist so unendlich wie der weite Ozean und sein Geist ist von großem Mitleid erfüllt.

Buddha hat keine Gestalt, aber er offenbart sich auf erhabene Weise und führt uns mit seinem ganzen mitfühlenden Herzen.

Dieses Buch ist kostbar, da es das Wesentliche der Lehren Buddhas enthält, die einst in über fünftausend Bänden niedergeschrieben wurden, sich seit mehr als 2500 Jahren bis auf den heutigen Tag erhalten haben und über die Grenzen aller Länder und Rassen der Welt hinaus an uns weitergegeben wurden.

Die in diesem Buche enthaltenen Worte Buddhas offenbaren und erläutern auf wunderbare Weise wirkliche Geschehnisse des menschlichen Lenens und Geistes.“(16)

「この人間世界は苦しみに満ちている。生も苦しみであり，老いも病も死もみな苦しみである。怨みあるものと会わなければならないことも，愛するものと別れなければならないことも，また求めて得られないことも苦しみである。まことに，執着を離れない人生はすべて苦しみである。これを苦しみの真理（苦諦）という。」(17)

„Die Welt ist voller Leiden. *Von Anafang an* besteht das Leben aus Leiden. Altersschwäche ist Leiden, Krankheit und Tod sind Leiden. Einem Menschen voller Haß gegenüberzutreten ist Leiden, von einem geliebten Menschen getrennt zu werden ist Leiden, vergeblich zu kämpfen, um seine eigenen Bedürfnisse zu befriedigen, ist Leiden. Kurzum: Leben, das nicht frei ist von Begierde und Leidenschaft, bringt immer Leiden mit sich. Dies wird die Wahrheit des Leidens genannt.“(18)

ここでは，「生も苦しみであり」を，„Von Anfang an besteht dan Leben aus Leiden.“ と，やや意訳している。「生」を「生まれてくること」と訳すと，その意味を理解しないドイツ人がいるからである。その他の部分は，単語も，センテンスの長さも，全体としての長さも，日本語とほぼ同じように出来上っている。『仏教聖典』全体を通して，翻訳の姿勢としては，可能な限り，この程度の，逐語訳になるよう心がけた。もちろん，法華経，大般涅槃経，維摩経，華厳経，観無量寿経等々，経典からの引用が多く，したがって，直訳不可能な個所も数多くなった。また，将来，英語・ドイツ語対照の『仏教聖典』が出版されるため，少くともページ単位で『英文仏教聖典』と行数をそろえてほしい，という要求も出されて，止むを得ず形を変えた個所もある。

なお，これは意訳ではないが，文字通りに訳すと，ドイツ人に奇妙な感じを与える個所は，ドイツ語のふつうの表現を用いた。

「折から春の陽はうららかに，アショーカの花はうるわしく咲きにおっていた。妃は右手をあげてその枝を手折ろうとし，そのせつなに王子を生んだ。天地は喜びの声をあげて母と子を寿いだ。ときに四月八日であった。」(19)

この文中，「そのせつなに」を „In dem Moment als sie dies tat,“ と訳すと，文字通り，瞬間の出来ごとになってしまい，奇妙な感じがする。そこで，次のように訳した。

„Die Königin war ganz umgeben von Ashoka-Blüten. Voll Entzücken streckte sie ihren rechten Arm aus, um einen Zweig zu pflücken. *Als sie dies tat,* wurde der Prinz geboren. Himmel und Erde waren erfreut und beglückwünschten die Königin zur Geburt des Königlichen Kindes. Es war der achte April, ein denkwürdiger Tag.”(20)

上記，「この人間世界は苦しみに満ちている。生も苦しみであり……」という文章は，いわゆる，生・老・病・死・愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦という，人生の苦悩の根本原因である八苦であり，「生老病死」の「生」は，この世に生まれてくることを意味するが，発想の違いもあって，これは，ドイツ人には理解し

難い。

また，諸経典から引用した比喩の中には，ドイツ語圏の人々にとっては理解するのが困難であると思われるものもあるが，これには手を加えず，そのままの内容で訳した。

次に，「アショーカの花はうるわしく咲きにおっていた。妃は手をあげてその枝を手折ろうとし……」の「アショーカの花」は，どの程度の大きさと，高さの木に咲くどのような花か，その実物に対する知識がないため，「手折る」という動詞に，どの語を用いるべきか悩まされたが，インド仏教学者の話を参考にして，„pflücken“ を用いた。また，「乳がゆ」は，これに相当する語がドイツ語にはなく，やや似た食べ物としては，„Milchbrei“ があるが，これら二つは別種の食べ物であるため，„Milchbrei“ を用いず，単に „eine Speise“ と訳した。このレアリア（realia）の問題については，次稿で論究したい。

3．雅語の使用

『ドイツ語仏教聖典』は，ドイツおよびオーストリーとスイスの，ホテルの各室に置くことを目的としている。日本語の『仏教聖典』は，だれもが読み得るように，表現にも配慮がなされているという。ドイツ語訳の場合も，この配慮は当然なされなければならない。翻訳である以上は，内容はもちろん，その文体も，原典である『仏教聖典』に従うべきであることは言うまでもない。

『仏教聖典』は，易しい表現で書かれているかに見えて，しかし決して易しい表現とは言えない個所も多い。語句も易しいとは言えず，古い語いも多く使われている。日本語に忠実であればドイツ語に訳す場合も，古いことばや，雅語を使用せざるを得ない。雅語を用いれば，文体もまた，それにふさわしいものにしなければならない。ほとけ（Buddaha）の第一章，第二章，第三章，おしえ（Dharma）の第一章から第五章まで，『ドイツ語仏教聖典』の 117 ページまでは，その後の各章と比較して，古い表現，古い語い，雅語が多く目につく。ほとけ　第一章　史上の仏　第一節　偉大な生涯　の中から引用して，ドイツ語訳と比較してみよう。

「いまや天地の間に太子はただひとりとなった。太子は静かに木の下に端座し，命をかけて最後の思惟に入った。「血も涸れよ，肉も爛れよ，骨も腐れよ。さとりを得るまでは，わたしはこの座を立たないであろう。」これがその時の太子の決心であった。」(21)

„Der Prinz blieb somit allein zurück. Er war noch schwach, aber unter Aufbietung seiner letzten Lebenskraft versuchte er, zu einer höheren Stufe des Nachsinnens zu gelangen, indem er sich sagte: „Blut kann ausgepumpt werden, Fleisch kann verwesen, Knochen können zerfallen, aber ich werde diesen Ort nie verlassen, bis ich den Weg zur Erleuchtung gefunden habe.“(22)

日本語の「端座し」「血も涸れよ」「肉も爛れよ」「骨も腐れよ」などのように，日常語とかけ離れた表現は，ドイツ語訳の方には含まれていない。しかし，それにもかかわらず重さを感じるのは，一つには語順のためであるが，それ以上に，„unter Aufbietung seiner letzen Lebenskraft”（命をかけて）という言句が入っていることによる。この種の表現を，大げさに感じる度合いは，ドイツ人の方がはるかに強い。

「その日の太子の心はまことのたとえるものがないほどの悪戦苦闘であった。乱れ散る心，騒ぎ立つ思い，黒い心の影，醜い想いの姿，すべてそれは悪魔の襲来というべきものであった。太子は心のすみずみまでそれらを追求して散々に裂き破った。まことに，血は流れ肉は飛び，骨は砕けるほどの苦闘であった。」(23)

„Es war ein starker und unvergleichlicher Kampf! Sein Geist war verzweifelt und voll wirrer Gedanken, dunkle Schatten hingen über seinem Gemüt; er war belagert von all den Ver-

lockungen des Bösen. Aber sorgfältig und geduldig prüfte er sie eine nach der anderen und verwarf sie alle. Es war in der Tat ein harter Kampf, der sein Blut dünn werden, sein Fleisch abfallen und seine Knochen schmerzen ließ."[24]

これは，いわゆる gehobene Sprache であり，読む時のリズムを考えてあるため，ややかたく感じられるが，日本語の場合よりは，ずっとやわらかい。

これら文体の問題も，次稿で考えてみたい。

註

(1) 仏教聖典 112 ページ。
（発行所　財団法人　仏教伝道協会）
(2) *Die Lehne Buddhas* 107 ページ。
（大野昭英訳　独語・仏教聖典　発行所　財団法人　仏教伝道協会）
(3) 仏教聖典 118 ページ。
(4) *Die Lehre Buddhas* 179 ページ。
(5) 仏教聖典 26 ページ。
(6) *Die Lehre Buddhas* 15 ページ。
(7) 仏教聖典 184 ページ。
(8) *Die Lehre Buddhas* 183 ページ。
(9) 仏教聖典 33 ページ。
(10) *Die Lehre Buddhas* 22 ページ。
(11) 仏教聖典 192 ページ。
(12) *Die Lehre Buddhas* 192 ページ。
(13) 仏教聖典 169-170 ページ。
(14) *Die Lehre Buddhas* 166-167 ページ。
(15) 仏教聖典 見開。
(16) *Die Lehre Buddhas* とびら。
(17) 仏教聖典 48 ページ。
(18) *Die Lehre Buddhas* 38 ページ。
(19) 仏教聖典 14 ページ。
(20) *Die Lehre Buddhas* 3 ページ。
(21) 仏教聖典 18 ページ。
(22) *Die Lehre Buddhas* 7 ページ。
(23) 仏教聖典 18 ページ。
(24) *Die Lehre Buddhas* 7-8 ページ。